

特集

東京大学の教育

～「大学教育の達成度調査」からみえてくるもの

大学総合教育研究センター

はじめに

大学総合教育研究センターでは、教育企画室／評価支援室の委託を受け、昨年度の卒業生に対する大学教育の達成度に関する調査を実施した。このような東京大学の卒業生に対する悉皆（全数）調査が行われるのは、初めてのことである。この調査は、平成21年3月に平成20年度の卒業生3,097名を対象として実施され、回収率は約40%であった。調査にご協力をいただいた各学部と学生みなさんに御礼を申し上げる。また、調査の実施にあたっては調査委員会を組織した。関係者の皆様にも御礼を申し上げたい。

この調査は、東京大学の教育・研究環境の向上を目的として、学生に、東京大学の学習環境、学習経験や大学生活についてたずねるものである。調査結果は、大学総合教育研究センターで分析し、その結果を東京大学の自己評価さらに教育研究の改善に活用することとなっている。本報告書は、このうち、全体の速報を示すものであり、今後よりいっそうの分析を続け報告していく予定である。

今回は初めての試みであり、学部によって回収率にかなりのばらつきがあり、全体の傾向として見るためには留意が必要である。こうした点も含め、調査を改善し、本年度以降も実施していくことになっている。本報告書に関しても、忌憚のないご意見をいただければ幸いである。また、引き続き各学部と新卒業生諸氏の調査へのご協力をお願いしたい。

2010年2月

大学総合教育研究センター長

岡本和夫

調査実施組織

大瀧友里奈 大学総合教育研究センター・特任助教 ○大多和直樹 大学総合教育研究センター・助教
岡本 和夫 大学総合教育研究センター長 ○小林 雅之 大学総合教育研究センター・教授
藤原 毅夫 大学総合教育研究センター・特任教授 山本 泰 大学院総合文化研究科・教授
○劉 文君 大学総合教育研究センター・特任研究員 (五十音順 ○は、本報告書執筆者)

実施方法

- アンケート送付日 : 平成21年3月24日
- 送付数 : 3,097票（卒業生数）
- 回答数 : 1,227票（平成21年4月20日現在）
- 回収率 : 39.7%（回収率は、回収数 / 卒業生数 で計算した）

※学部（各学科）が、卒業式後の書類配布時に調査票を配布し、以下のAおよびBの方法で回答・回収した。

A. 自記による回答後、各学部が回収（法、理、農、経済、薬）

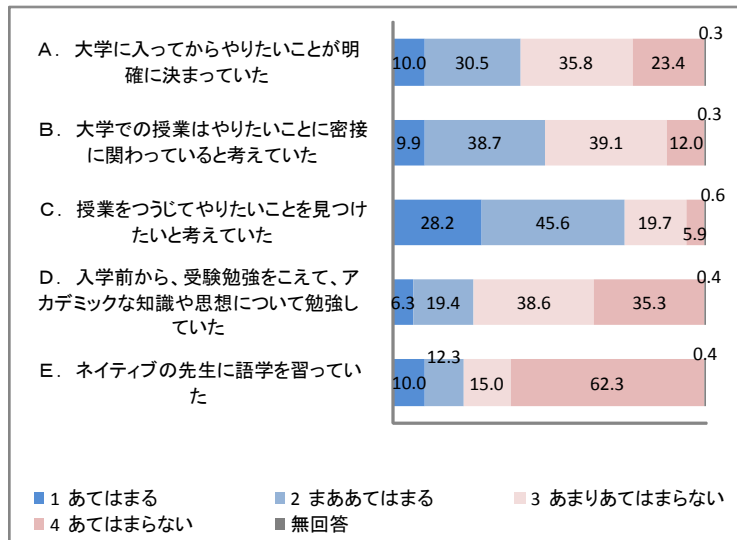
B. 自記による回答後、大学総合教育研究センターに郵送（医、工、教養）

A.B. 併用 自記による回答後、各学部が回収および大学総合教育研究センターに郵送（文、教育）

入学時にやりたいことが明確：約4割

「入学前からアカデミックな知識・思想」は4分の1にとどまる

Q. 入学時の様子についてお聞きします。
つぎのことは、どの程度あてはまりますか。

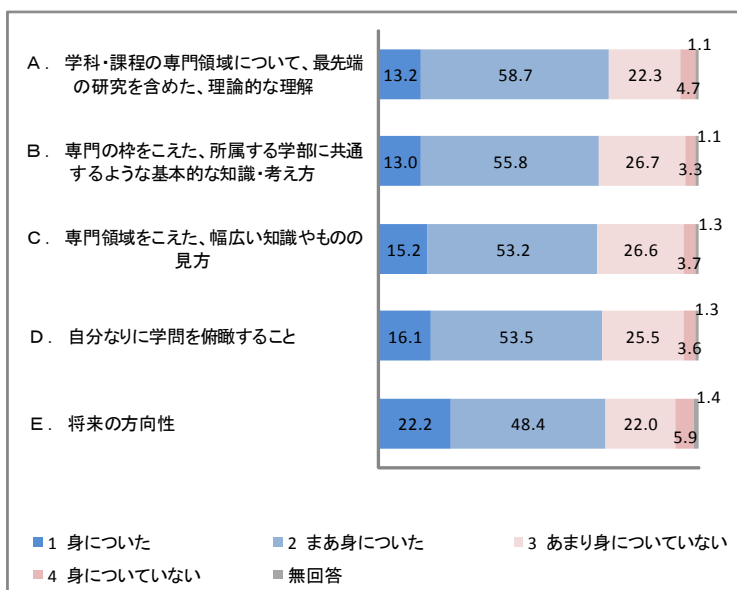


「A. 大学に入ってからやりたいことが明確に決まっていた」とする学生は、「あてはまる」と「まああてはまる」をあわせて40.5%となる。半数近くは明確でないことになるが、それゆえに、授業への関心は高く「C. 授業をつうじてやりたいことを見つけたいと考えていた」という学生は「あてはまる」と「まああてはまる」をあわせると73.8%にのぼる。

入学前の準備(レディネス)を見てみると「D. 入学前から…アカデミックな知識や思想について勉強していた」割合は、25.7%でそれほど高くはない。

7割の学生が「まあ身についた」

Q. あなたは、東京大学の教育をつうじて、以下のような点を身につけたと思いますか。



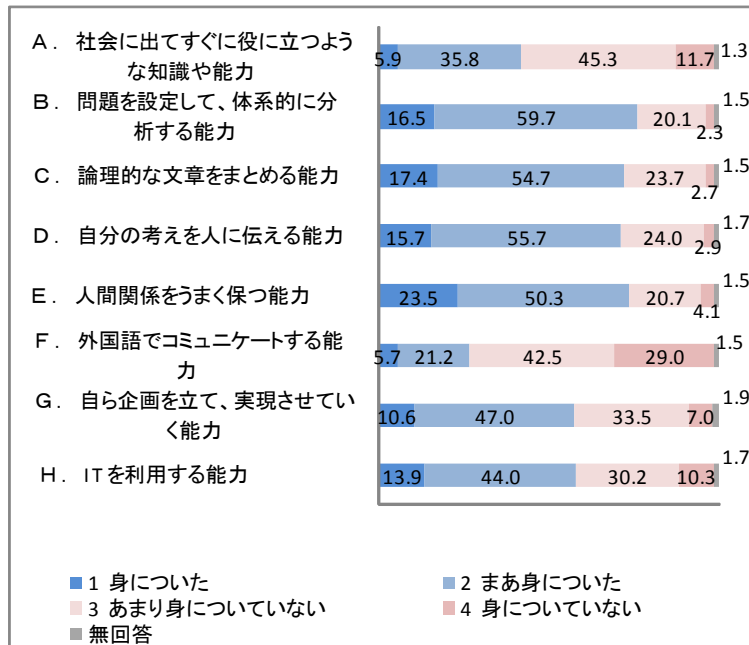
この質問では、まず、専門領域の理解、学部共通の基本的知識・考え方、幅広い知識や見方、学問の俯瞰の各項目において、習得のあり方に大きな違いは見られなかった。どの項目においても「身についた」が1割5分前後の値となり、「身についた+まあ身についた」で7割前後の値となっている。逆に「身につけていない」とする学生は1割に満たない。

「E. 将来の方向性」についてもほぼ同じ傾向にあるが、以上の4項目よりも「身についた」が22.2%と若干高くなっている。

汎用性の高い能力は4分の3の学生が身につけたとしている

実用性の高い能力はあまり身につけていない

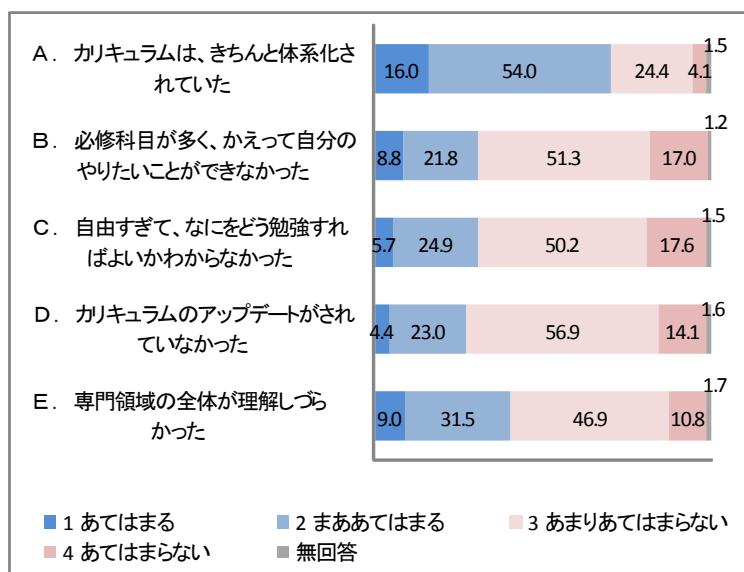
Q. あなたは、大学時代をつうじて、以下のような点を身につけたと思いますか。



大学時代をつうじて、身につけた能力としてあげられているのは、「B. 問題を設定して体系的に分析する能力」「C. 論理的な文章をまとめる能力」「D. 自分の考えを人に伝える能力」「E. 人間関係をうまく保つ能力」で、いずれも「身についた」と「まあ身についた」を合わせて7割以上の学生が身につけたとしている。これに対して、あまり身につけたと評価していないのは、「F. 外国語でコミュニケーションする能力」で、身につけたとする学生は3割に満たない。また、「A. 社会に出てすぐに役に立つような知識や能力」も約4割の学生が身につけたとしているに過ぎない。さらに、「G. 自ら企画を立て、実現させていく能力」「H. ITを利用する能力」についても、身につけたとしている学生は、6割以下となっている。

カリキュラムについては、肯定的な回答が多いが、約3分の1の学生は評価していない。特に「専門領域の全体が理解しづらかった」という学生は約4割

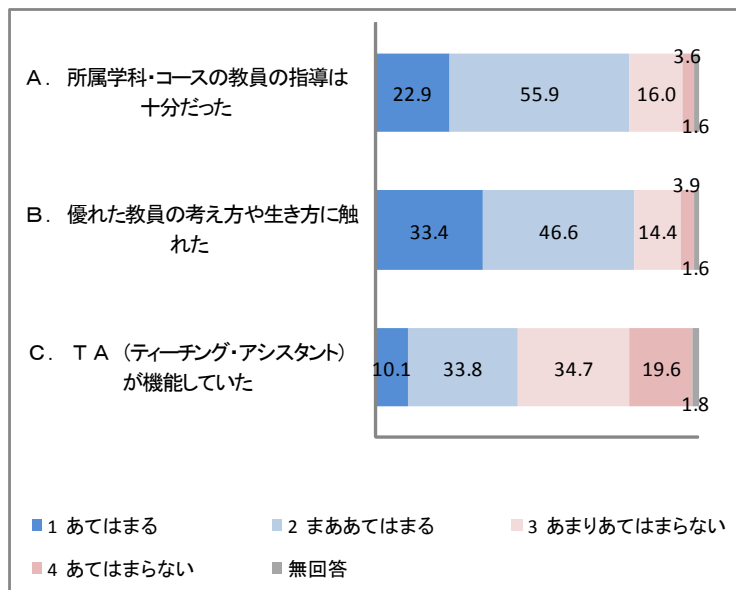
Q. 専門学部・学科等のカリキュラムについてお聞きします。



専門学部・学科のカリキュラムについて、「A. きちんと体系化されていた」と評価する学生は、「あてはまる」と「まああてはまる」を合わせて約7割で、「B. 必修科目が多く、かえって自分のやりたいことができなかった」「C. 自由すぎて、なにをどう勉強すればよいかわからなかった」「D. カリキュラムがアップデートされていなかった」という否定的な項目について、「あてはまらない」と「あまりあてはまらない」という回答はいずれも7割前後にのぼっている。しかし、「E. 専門領域の全体が理解しづらかった」という学生は約4割となる。

8割の学生が「指導は十分」、「優れた教員の考え方・生き方に触れた」

Q. 教員や教育制度との関係についてお聞きします。



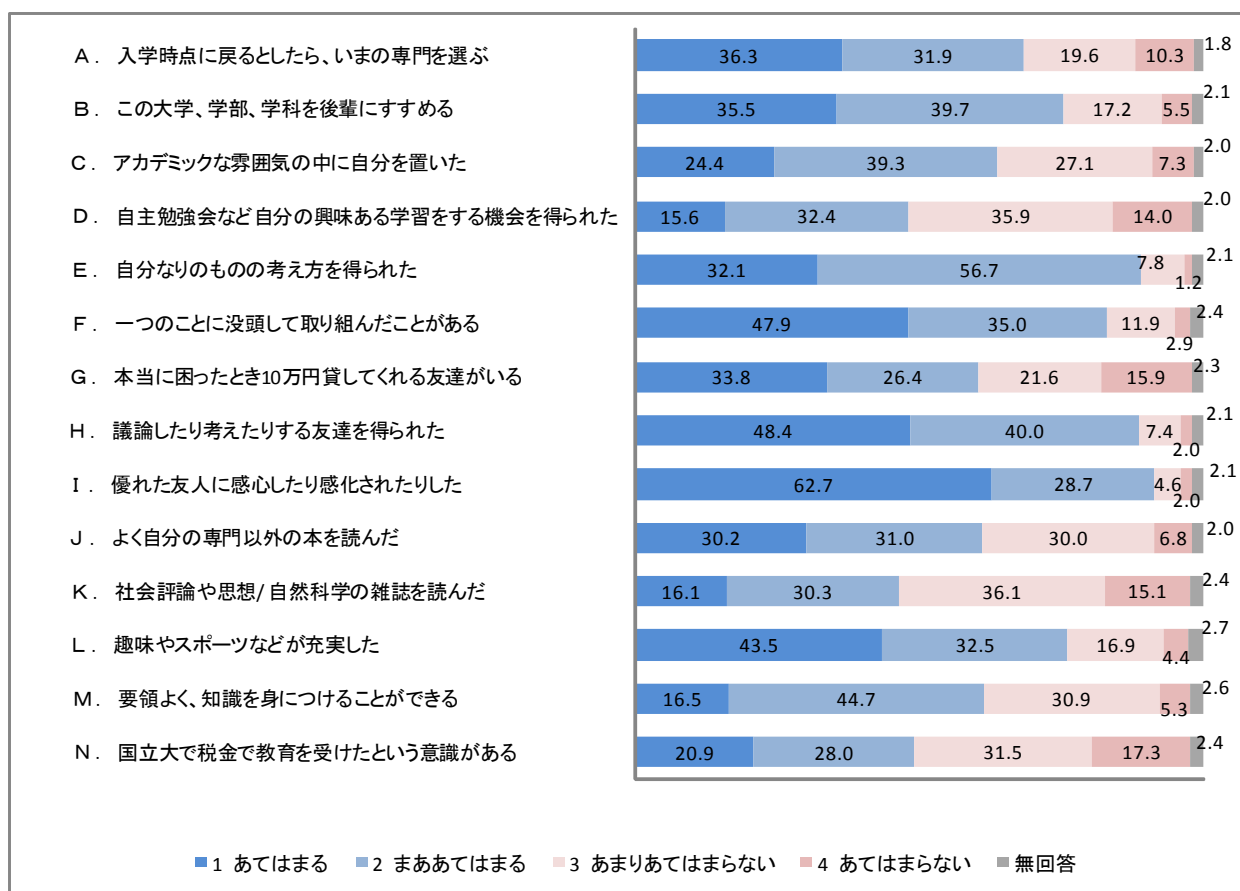
「A. 所属学科・コースの教員の指導は十分だった」は、「あてはまる+まああてはまる」をあわせると約8割にのぼる。また、「B. 優れた教員の考え方や生き方に触れた」についても同様の数値がみられた。比較的高い割合となっていることが窺える。この二つの質問項目について「あてはまる」をみると「B. 優れた教員の考え方や生き方に触れた」で、33.4%となり、「A. 所属学科・コースの教員の指導は十分だった」の22.9%を約10ポイントほど上回る結果となった。

「C. TAが機能していた」については、実施している部局とそうでないところもあるが、機能していると答えた学生は、4割強であった。

友人から感化、友人と議論：9割

「自分なりのものの考え方の習得」：9割

Q. 大学時代を通じての経験を総合して、つぎのようなことはどの程度あてはまりますか。



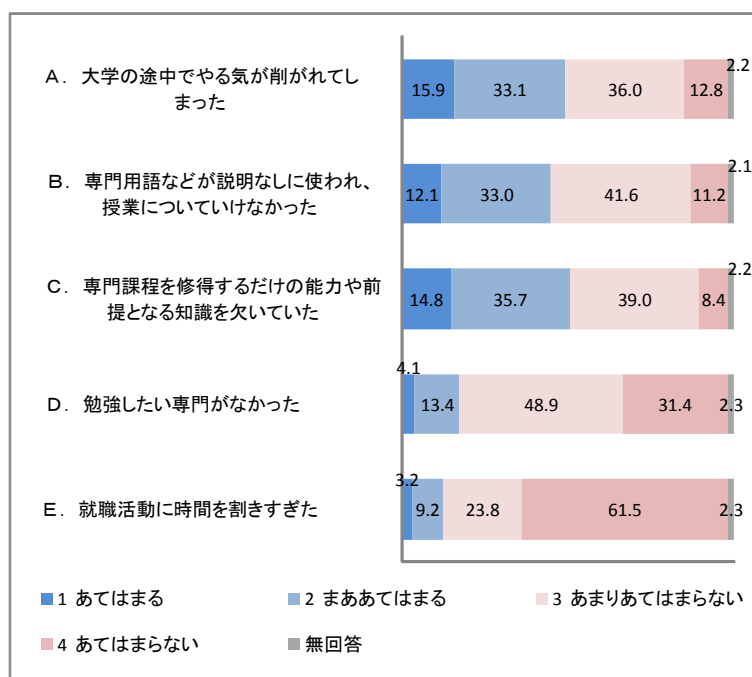
学生が優れた友人と出会う経験が多いということが東京大学の学習環境の一つの特徴といえるだろう。「I. 優れた友人に感心したり、感化されたり」といった経験をするものが「あてはまる」で6割となり、「あてはまる+まああてはまる」では、9割にのぼる。また、「H. 議論したり考えたりする友達」もまた、「あてはまる+まああてはまる」をあわせると9割に迫る数値となった。「G.10万円貸してくれる友達」という項目は、困ったときに助けてもらえるという感覚を尋ねたものであるが、これも5割にのぼる。

このような環境のなかで、9割弱が、「E. 自分なりのものの考え方」を習得したと答え、また、「F. 一つのことにと没頭した」経験も8割にのぼるなど、個人の豊かな学習経験でも高い割合の回答が得られた。

「N. 国立大で税金で教育を受けたという意識がある」については、約半数が「あてはまる+まああてはまる」と答えている。「あてはまらない」と答えた者は17.3%となっている。

大学時代の経験：5 割弱の学生が「大学の途中でやる気が削がれてしまった」 「就職活動に時間を割きすぎた」学生が 1 割強

Q. あなたは、大学時代につきのような経験がありましたか。

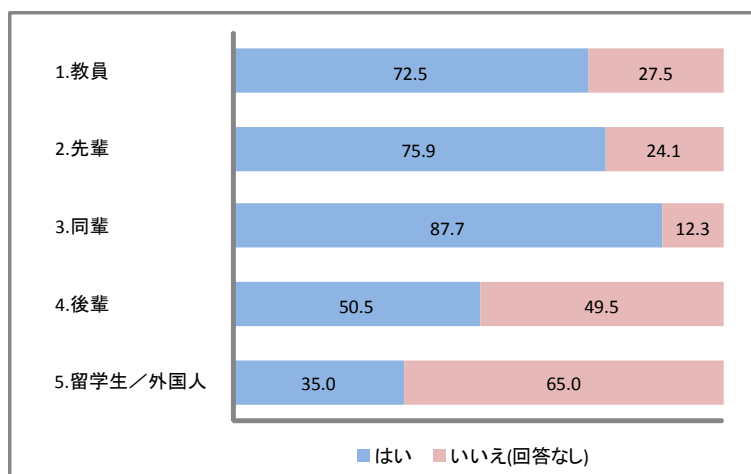


「A. 大学の途中でやる気が削がれてしまった」の項目について、「あてはまる」と回答した学生は 15.9%、「あてはまる + まああてはまる」で 5 割弱となる。「無回答」の 2.2% を除けば、肯定的な回答をした学生の割合は半分以上になるとの結果である。また、「B. 専門用語などが説明なしに使われ、授業についていけなかった」と「C. 専門課程を修得するだけの能力や前提となる知識を欠いていた」の二つの項目についての回答は、「あてはまる」で、それぞれ 12.1%、14.8% であり、「まああてはまる」とあわせると、それぞれ、45.1%、50.5% に達している。

その一方、「D. 勉強したい専門がなかった」の項目について、「あてはまる」との回答はわずか 4.1% で、「まああてはまる」とあわせても、2 割以下にとどまっている。また「E. 就職活動に時間を割きすぎた」について、「あてはまる」と回答する学生は 3.2% にすぎず、「あてはまる + まああてはまる」で、12.4% である。

教員との学問的交流は、約 4 分の 3 後輩とは 5 割にとどまる

Q. 次のような人と学問的な交流がありましたか。



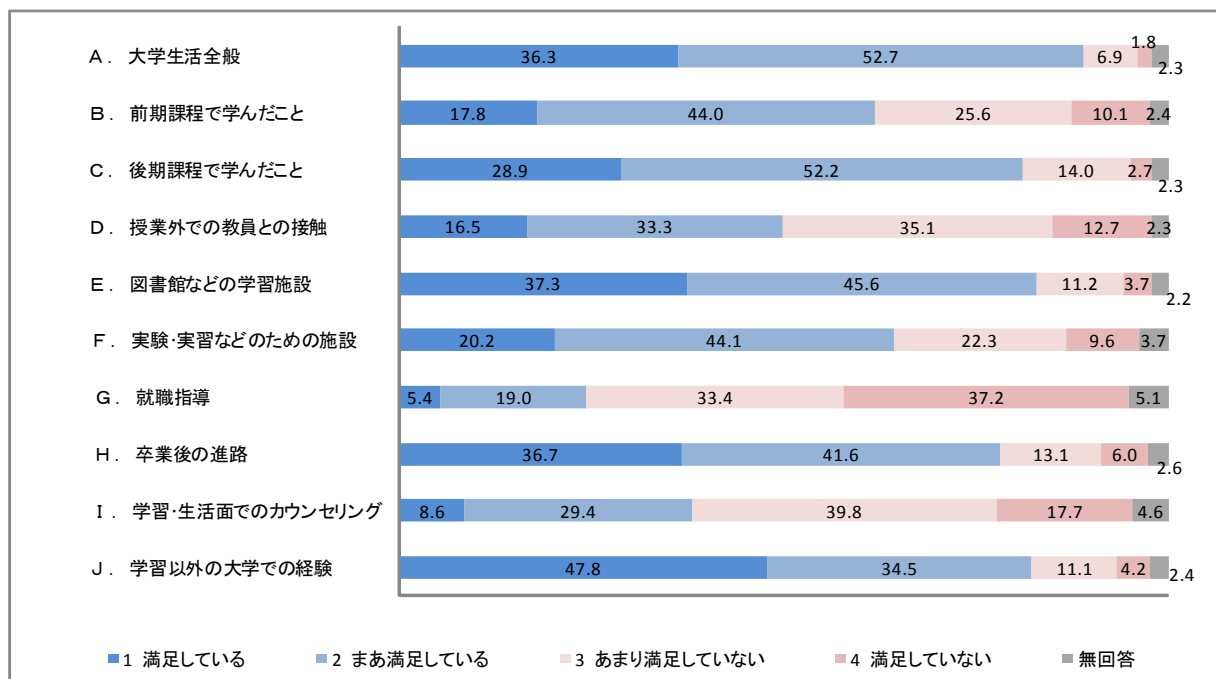
学問的な交流のあり方についてみていくと、教員との交流は 72.5% となる。教員との交流がないという状況がどのように生じるのか—学生が大学から離れてしまっているのか、あるいは、教育体制にあるのか—など、その原因を探っていくことが必要となると考えられる。

大多数の学生にとって、同輩とは、学問的な話をする機会があるとみられ、87.7% が交流があると答えている。教員よりも先輩の方が若干高くなることも見逃せない (75.9%)。研究室や学科など、先輩

との繋がりが機能していることがわかる。その一方、後輩では 50.5% にとどまる。留学生、外国人との学問的交流は、35% にとどまり、外国の方と学問的な交流をする機会はそれほど整っていないとみるべきだろう。

満足度：9 割弱満足 前期課程より後期課程のほうが満足度が高い
就職指導への満足度は低い、卒業後の進路についての満足度は高い

Q. あなたの大学生生活を通じた満足度についてお聞きます。



「A. 大学生生活全般」について、「満足している」(36.3%)と「まあ満足している」と回答する学生の割合は89%に達している。教育に関しては、「B. 前期課程で学んだこと」と「C. 後期課程で学んだこと」の項目で、「満足している+まあ満足している」と回答する割合は、それぞれ61.8%、81.1%となっている。

「D. 授業外での教員との接触」についての満足度は、「満足している」と回答する割合は16.5%で、「まあ満足している」(33.3%)とあわせれば、約5割となっており、A～Cにくらべてやや低い。「E. 図書館などの学習施設」と「F. 実験・実習などのための施設」に対する満足度は、比較的に高く、「満足している+まあ満足している」と回答する割合は、それぞれ82.9%、64.3%となっている。

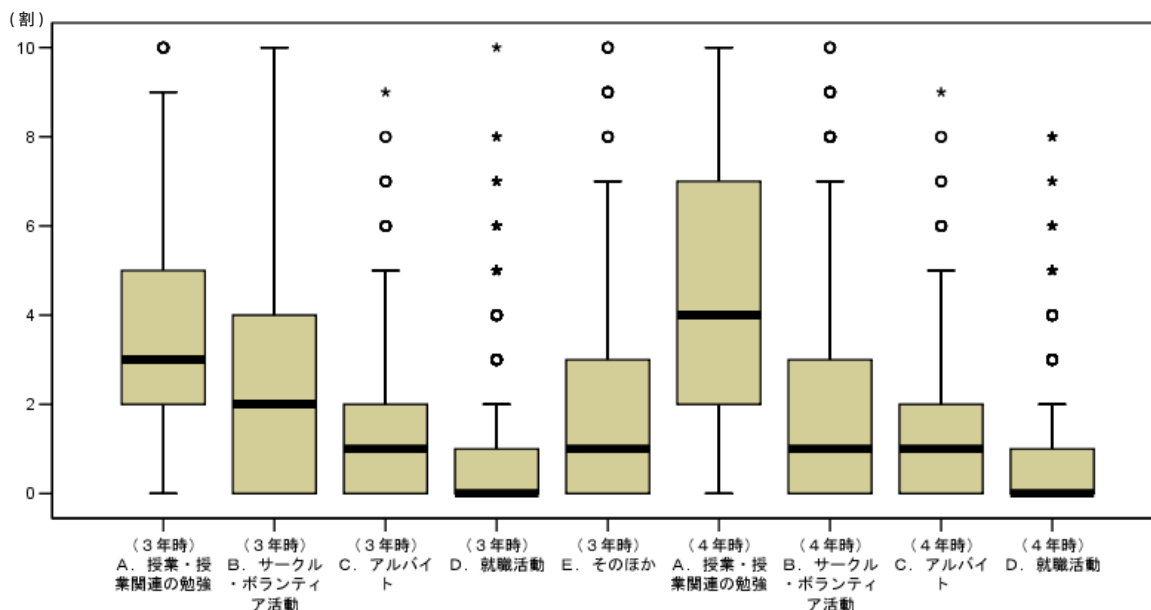
「G. 就職指導」に対して、「満足している」との回答はわずか5.4%で、「まあ満足している」(19.0%)とあわせて、24.4%にすぎない。しかし、逆に、「H. 卒業後の進路」には、「満足している」と回答する割合は36.7%、「まあ満足している」の割合は41.6%で、両者あわせると、78.3%に達している。しかし、この回答者には、卒業後、大学院に進学する者も含まれていることを留意すべきである。

「I. 学習・生活面でのカウンセリング」については、「満足している」との回答は8.6%で「まあ満足している」(29.4%)と、あわせて38.0%となっており、満足度が高いとはいえない。これに対して、「J. 学習以外の大学での経験」について、「満足している」(47.8%)と「まあ満足している」(34.5%)と回答者の割合は、82.3%に達している。

時間配分：授業・授業関連の勉強に力を入れている

4年生でさらにその傾向は強まる

Q. あなたは、次のような項目に、時間をどのように配分していましたか。



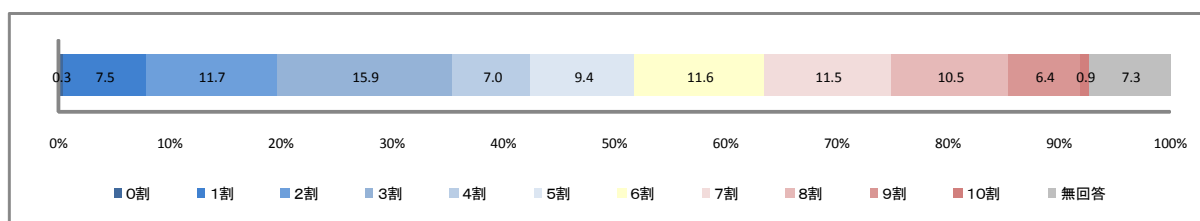
箱ひげ図：中央の太線は中央値、箱の中に50%が収まる（箱の上端が第1四分位点、下端が第3四分位点）。○および*は外れ値。

それぞれの項目への時間配分を割合でたずねた質問である。箱ひげ図から読み取れることは、3年時においても4年時においても、最も力を入れているのは「A. 授業・授業関連の勉強」である。平均をみると3年時には3割弱となるが、4年時には4割程度に増える。ただし、4年時には、分散もまた大きくなり、力を入れて勉強している人とそこそこの人の差が大きくなっている。

サークル活動の比重も高い。3年時の図をみると、授業・勉強との「箱」の部分の重なりが比較的大きいことがわかる。それにたいして4年時には、中央値が1割に低下するとともに、勉強との間の「箱」の重なりが少なくなっていることがわかる。4年生では、勉強シフトが起きていることがわかる。

成績は、ばらついている

Q. あなたの成績についてお聞きします。「優」(A)は何割くらいありましたか。



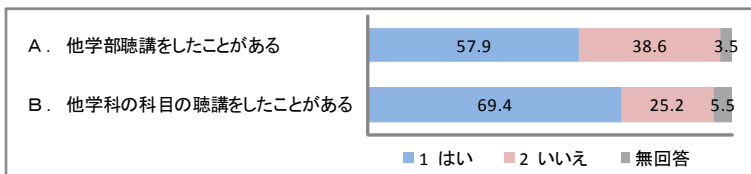
今回のサンプル全体で見た場合、成績はばらついているとみることができる。すなわち、両端（優の割合が0～1割、9～10割）で少なくなるものの、それ以外のカテゴリには若干の凸凹はあるものの10%程度の学生がいる。

ただし、これに関しては、学部間で成績をつける際の基準に差異がみられる可能性があり、その点についてはさらなる分析が必要となろう。

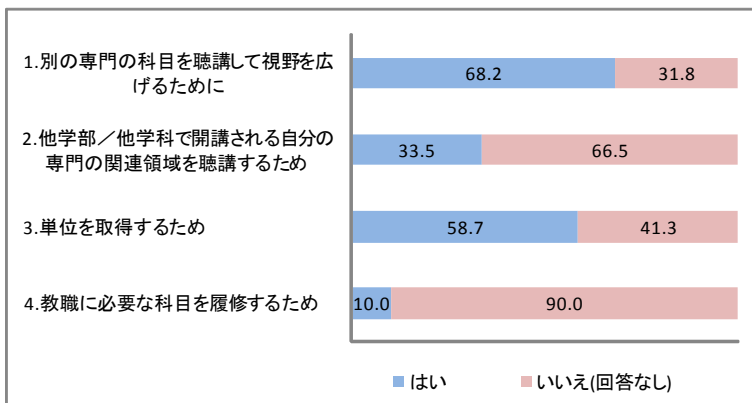
他学部聴講の経験者は約 6 割

視野を広げるための聴講が約 7 割

Q. 他学部聴講についてお聞きします。



Q. どういう意図で聴講しましたか。



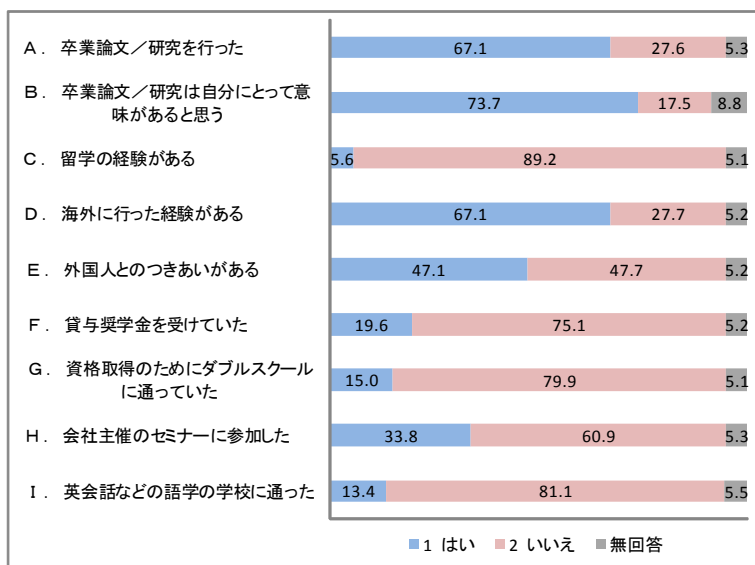
他学部聴講についてみていくと、聴講自体の経験者は 57.9% となり、比較的大勢の学生が他学部へと足を運んで授業を受けていることがわかる (1995 年に実施した同様の調査では 48%)。他学科聴講では、さらに多く 69.4% となる。ちなみに、表には載せていないが、他学部聴講も他学科聴講もしていない学生は 22.4% となり、かなり少なくなる。

他学部聴講の理由は、視野を広げるための聴講が (他学部聴講経験者の) 約 7 割を占めることが分かる。ただし、単位取得のためという理由での聴講も 6 割弱にのぼっていることに注意が必要となる。教職の取得のために他学部にという理由は 1 割にとどまる。

卒業論文の意味を感じる学生 : 約 7 割

ダブルスクールは 1 割強

Q. 在学時の学習機会・経験についてお聞きします。



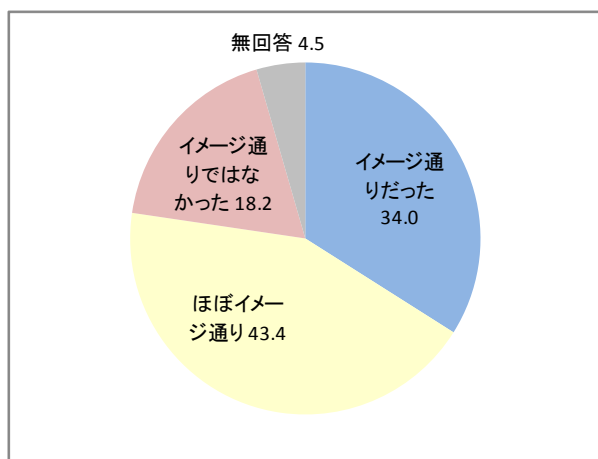
学習機会についてみていくと、特に大学が提供する学習機会の中で高評価を得ているのが卒業論文/研究である。「B. 卒業論文/研究は自分にとって意味があると思う」と答えている学生は 73.7% にのぼり、「A. 卒業論文/研究」を経験した学生の 67.1% にのぼる。卒論/卒研を経験していない学生もまた、その意味を評価しているということになる。

海外旅行の普及があるせいか、「D. 海外経験」は 7 割近くが大学生時代に経験するところとなっている。また、「E. 外国人とのつきあいがある」が 47.1% にのぼることにみられるように、外国人とコミュニケーションする機会を持つ学生も一定数いるとみてよい。その一方で留学経験となると 5% 程度である。

「G. 資格取得のためのダブルスクール」や「I. 英会話などの語学の学校に通った」は、今回のサンプル全体でみると 15% 程度となる。

進学先がイメージ通りは約8割

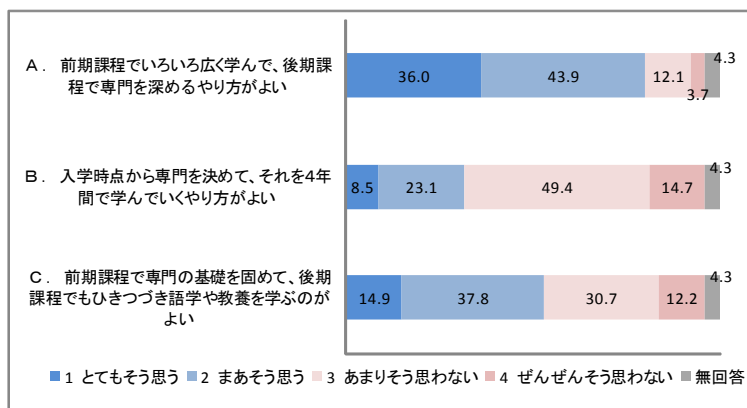
Q. 進学先は、進学前にイメージしていた通りでしたか。



進学先が、進学前にイメージしていた通りとする学生は、約3分の1、「ほぼイメージ通り」とする学生は、43%で、合わせて約8割の学生がイメージ通りだったとしている。これに対して、イメージ通りではなかったとする学生は約2割で、このイメージと現実の齟齬の要因について、今後分析を進めていく必要がある。

教養と専門の学習の仕方については、「前期課程は幅広く、後期課程は専門を深める」という現行方式を評価する学生が8割以上だが、後期課程で語学や教養も必要という学生も過半数

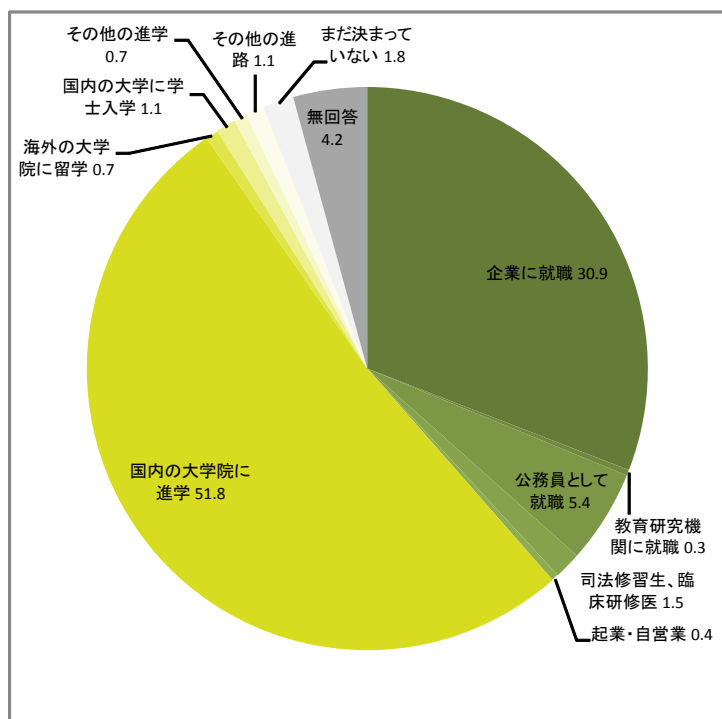
Q. 教養と専門の学習の仕方についていくつかの考え方があります。つぎの項目についてあなたはどのように考えていますか。



東京大学の独自の教育方式である前期課程での教養教育と後期課程での専門教育の組み合わせについて、学生の評価をたずねた。現行方式である「A. 前期課程でいろいろ広く学んで、後期課程で専門を深めるやり方がよい」について、「とてもそう思う」が約3分の1、「まあそう思う」が4割強で、合わせて約8割の学生が現行方式を評価している。これに対して、「B. 入学時点から専門を決めて、それを4年間で学んでいくやり方がよい」という学生は、約3割にすぎず、レイト・スペシャリゼーション (late specialization) を評価する学生が約3分の2となっている。ただし、「C. 前期課程で専門の基礎を固めて、後期課程でも引き続き語学や教養を学ぶのがよい」という方式を評価する学生も過半数に達しており、東京大学の学士課程教育全体については、まだ検討する余地があると考えられる。

4月からの進路予定：5割を超える学生が大学院に進学、企業に就職は3割

Q. 4月からの予定は、下の項目ではどれにあたりますか

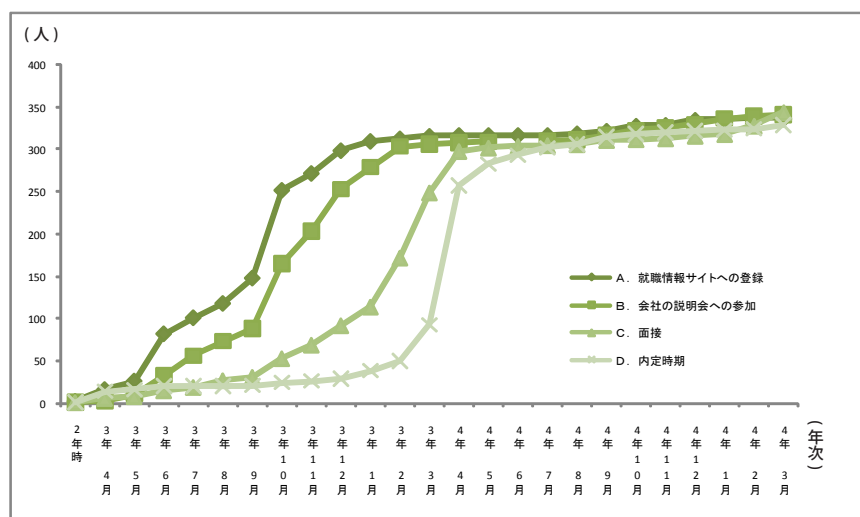


4月からの予定に関しては、「国内の大学院に進学」と回答した者の割合はもっとも高く、51.8%である。続いて、「企業に就職」が30.9%であり、この両者をあわせれば、8割を超えている。

残った2割の内訳は、「公務員として就職」5.4%、「司法修習生、臨床研修医」1.5%、「国内の大学に学士入学」と「その他の進路」が1.1%、「海外の大学院に留学」と「その他の進学」が0.7%、「起業・自営業」0.4%、「教育研究機関に就職」0.3%である。このように、学生は卒業時、多数の学生は進路を決めており、「まだ決まっていない」(1.8%)あるいは「無回答」(4.2%)とする学生はきわめて少数である。

早期化する就職活動：4年生の4月で3分の2が内定

Q. あなたは就職活動をいつから始め、いつ内定をもらいましたか。(民間企業への就職活動を行った人のみ)



グラフは、ある時期までに、どの程度の人が就職活動をはじめたのか、あるいは、内定をもらったのかを示している(累積度数)。特徴的なことはどの項目においても曲線が急激に上昇する時期があるということである。このことは、就職活動に標準的な段階(多くの人をはじめた時期や内定をもらえる時期)があることを意味している。それぞれの段階をみていこう。

※タテ軸は、その時期までに各項目のことがらを経験した人数(累積度数)
 ※進学者・無回答者を除いて集計した

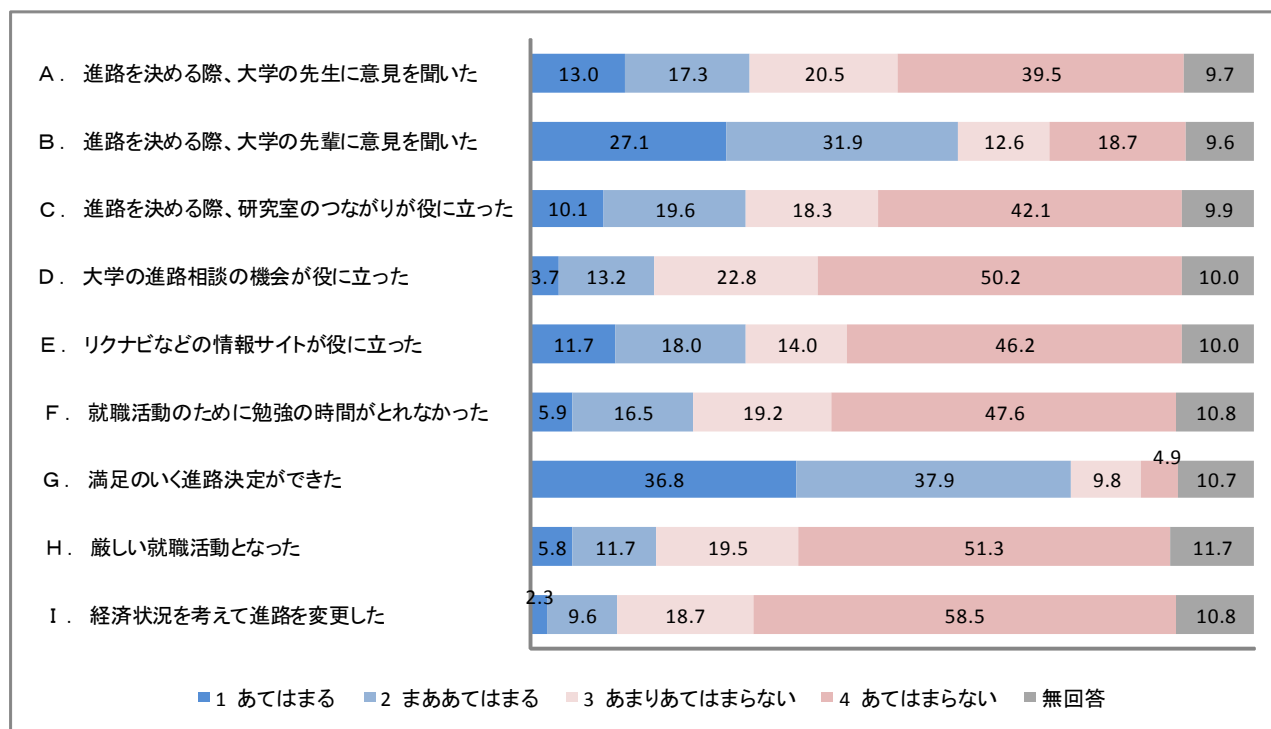
まず近年の就職活動は、情報サイト

への登録から始まることが知られているが、「A. サイトの登録時期」は、3年生の8月～9月に急激な伸びをみせる。これをすぐに後追する形で、「B. 会社説明会への参加」が追随し、3年生の9月～10月から曲線が一気に立ち上がる。「C. 面接」は、3年生の9月頃から緩やかに上昇するが、年明けの1月～3月に急激に上昇する。「D. 内定時期」は、3年生の2月までは緩やかであるが、3年生の3月～4年生の4月できわめて急激な伸びをみせ、4月の時点では3分の2の学生が内定をもらっているということになる。

進路決定：「大学の先輩の意見」がもっとも重要

約4分の3の学生が「満足のいく進路決定ができた」

Q. あなたの進路決定のプロセスについてお聞きします。



進路の決定のプロセスについては、「あてはまる」と「まああてはまる」とあわせてみれば、「B. 進路を決める際、大学の先輩に意見を聞いた」と回答する割合がもっとも高く、59%である。続いて、「A. 進路を決める際、大学の先生に意見を聞いた」が30.3%で、「C. 進路を決める際、研究室のつながりが役に立った」と「E. リクナビなどの情報サイトが役に立った」が29.7%となっている。「D. 大学の進路相談の機会が役に立った」との回答の割合は16.9%にとどまっている。

「F. 就職活動のために勉強の時間がとれなかった」について、「あてはまる」との回答者は5.9%で、「まああてはまる」(16.5%)とあわせれば、22.4%となっている。これに関連して、「H. 厳しい就職活動となった」について、「あてはまる」と回答する学生は5.8%で、「まああてはまる」11.7%、両者があわせて、17.5%である。しかし、一般的に現在の就職状況は厳しいにもかかわらず、「G. 満足のいく進路決定ができた」について、「あてはまる」(36.8%)と「まああてはまる」(37.9%)あわせれば、74.7%に達している。

連絡先：大学総合教育研究センター ホームページ：<http://www.he.u-tokyo.ac.jp/>
 内線：22390 問い合わせメールアドレス：cerd@he.u-tokyo.ac.jp 担当：大多和まで